消えた鼓動

心臓移植を追って

筑摩書房

消えた鼓動

昭和四十六年四月二十五日初版第一刷発行

定価　五〇〇円

著者　吉村　昭

発行者　竹之内静雄

東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所　筑摩書房

電話東京（二九）七六五一（代表）

振替　東京　四一二三

郵便番号　一〇一—九九

印刷　厚徳社

製本　和田製本

© 1971, A. Yoshimura

（分類）0195（製品）81023（出版社）4604

目次

第一章　試写室にて　三
第二章　電話対談室にて　一四
第三章　平岸火葬場にて　三〇
第四章　南アフリカにて　五一
第五章　非白人居住区にて　八〇
第六章　マイモニディーズ病院にて　一一七
第七章　恵庭町宮崎家にて　一三四
第八章　北海道赤十字血液センターにて　一四七
第九章　札幌医科大学附属病院にて　一七六
第一〇章　地下解剖室にて　一九九
第一一章　東京国際空港にて　二三八

消えた鼓動

——心臓移植を追って——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章　試写室にて

試写室は、二十個たらずの椅子しかない小さな部屋だった。

前面の壁には、映画劇場のスクリーンを極度に小型にしたスクリーンが貼りつけられている。両脇に垂れる緞帳も短く、いわば映画劇場内部のミニチュアーとでもいった感じであった。

一年ほど前から知己となった石原プロのプロデューサー川野泰彦氏の好意でその試写室を借りたのだが、映写されるフィルムは、東京大学医学部助手近藤芳夫氏の所蔵しているものであった。

近藤氏に初めてお眼にかかったのは、四ケ月ほど前の昭和四十三年三月上旬であった。

私は、その頃重苦しい日々を送っていた。朝日新聞に心臓移植を素材とした連載小説を書くことを約束していたからであった。

私にその話をきり出したのは、朝日新聞社学芸部の井上日雄氏であった。氏の話によると、学芸部では同紙日曜版に二十世紀の知的アドベンチャーを主人公とした連載小説を企画し、その第一回として私に心臓移植を素材とした小説の執筆依頼を決定したという。

私は、気が臆した。医学には全く知識のない私がその素材ととりくむためには、気の遠くなるような調査を必要とする。『零式戦闘機』という長篇小説をようやく書き上げたばかりの私は、調べることにすっかり疲れきってもいた。軍用機について知識も関心もなかった私は、その設計、製作技術の過程を咀嚼することに半年以上を費したりしていたので、当分の間調査を必要とする小説などには手をつけまいと思っていたのだ。

井上氏は、私が気乗りのしないことを察したらしく、その日は雑談をした後に別れた。

その間、学芸部内でどのような経過があったのか知らぬが、再び井上氏から電話があって熱心に執筆を依頼してきた。

私は、その前年の暮れに南アフリカ共和国のクリスチャン・バーナードという外科医が世界初の心臓移植手術をおこなってから世界各国で手術が実施されていることを知っていた。もしも私がその小説の執筆を引き受けるとすれば、当然それらの外科医からも取材をしなければならないはずだった。

海外に一度も足をふみ出したこともなく医学の知識も持ち合わせていない私が、世界の第一線で活躍している心臓外科医から綿密な取材をするなどということは不可能にちがいなかった。それに、新聞小説の読者の中には数多くの医師たちがふくまれている。どうせ小説を書くなら、それらの医学専門家たちをも納得させるような作品を生み出さねばならぬが、私にはそのようなこ

とは出来そうにも思えなかった。

その後、井上氏から再三同じような趣旨の連絡があったので、私ははっきりと依頼をことわるため朝日新聞社に出向いて行った。伝統のある新聞に連載小説を執筆したい気持は強かったのだが、素材が素材であるだけに辞退する以外にないと思ったのだ。

しかし、結果は逆になった。私が、同社の八階にあるレストランで待っていると、井上氏をはじめ山崎端夫部長、門馬義久氏、木村庸太郎氏が姿をあらわし、小説の話になった。

私は、医学知識の全くないことを理由に辞退することを申し出でた。が、山崎氏たちは、私が決して医学と無縁だとは言えぬはずだと主張する。

終戦直後、私は、肺結核治療のための胸廓成形術という手術を受けた。それは、一年以上生存率四〇パーセントという開発途上にあった成功率の少い手術であった。局所麻酔のみによっておこなわれた施術であったため、五時間五十分の手術時間中私の意識は鮮明で、絶えず襲ってくる激痛にベッドの上ではねつづけた。その手術で私は肋骨を五本切除されたが、文学を志してから手術をうけた頃のことを素材に私小説をいくつか書いた。それが私の小説を書く出発点ともなったのだが、その延長として死を主題とした小説を書くようにもなった。

山崎氏たちは、私のそうした類いの小説をよく読んでいてくれた。そして、手術台にしばりつけられた経験をもつ私が、患者の眼から心臓移植という素材と対することは意義があるし、執筆

依頼の動機もそこにあるのだと言った。

私の気持は、大きくゆらいだ。それまで私は、心臓移植を医学の側からしかみていなかったことに気づいた。たしかにその手術には心臓を提供するため手術台上にのせられた人間とその移植を受けた心臓病患者がいる。提供者という一個の人間の死を必須条件として、心臓病患者の生命を延長させようとするその医学の試みには、二人の患者とそれらの遺・家族の間に深刻なドラマが展開されているはずであった。

心臓移植は、科学の一分野である医学の問題に限定されたものではなく、人間とはなにかという問いかけとして考えられねばならないのだろう。そして、それは私が文学を志した動機に完全に合致するものだし、もしかすると心臓移植を素材とした小説を書くことは、私の求めていたものを包含しているのかも知れないと思った。

私の内部に、書いてみようかという意識と同時に不遜な感情も湧いてきていた。私は造艦技術に無知識ではあったが軍艦の建造を書き、土木技術に無縁であったが隧道工事に従事する技師や人夫を主人公にした小説も書いた。

心臓移植のメスは、人体の胸部に突き立てられる。肉体は私自身も所有しているし、掌を胸部にあてれば心臓の鼓動にもふれることができる。もしかすると徹底的に知識を得ることにつとめれば、対象が人体であるだけに作品化できるだけの内容はつかむことができるかも知れないと思

った。

私は、いつの間にか心臓移植は私自身にとってぜひ書かねばならぬ素材だと思いはじめていた。書きたい素材と対した時常にそうであるように、濃い霧の奥に漠とした世界がひろがっているのを感じた。そこには、屹立した峰々を背景に古城のような建物や密集した人家がある。川には魚の銀鱗がひらめき、湖には深々とした青い水がたたえられている。墓地もあれば、侘しい商店もある。町外れには蔓類のからみつく暗い樹林の繁みもあるし、犬の吠える声もきこえる。しかし、その世界は実際に足を踏みこまなければ、なにもわからないのだ。

私は執筆を約し、外へ出た。新しい仕事にとりくむことに気持がたかぶっていたが、素材が素材であるだけに激しいおびえも感じた。

私は、すぐにタクシーを拾うと神保町に行き書店をまわって、心臓に関する医学書を手当り次第に買いあさった。その日から私は、医学書を読む生活に入った。そして、友人の中井暲典という東大医学部卒の医師に、心臓とその疾病についての教示を受けに通った。かれの家から夜おそく帰る私は、なにか受験のため進学塾に通っているような錯覚をおぼえて思わず苦笑をもらすこともあった。

そうした私に、学芸部では心臓移植の知識を得る手がかりとして、二人の心臓外科学者と、心臓移植の死の判定問題を法的に理解するため法律学者に引き合わせてくれた。それは、日本心臓

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

外科学界で榊原仟東京女子医大教授とともに最高権威者といわれている木本誠二氏と、一橋大学法律学部教授植松正氏で、他の一名は近藤芳夫氏であった。

結局私は、その後近藤氏を東大医学部附属分院に頻繁にたずねて、心臓移植の話をきくようになった。

偶然のことではあるが、氏の勤務している東大分院は終戦後私が胸廓成形術をうけた病院であり、執刀医の田中大平助教授は氏の上司であった。また近藤氏が紹介してくれた分院長に会ってみると私の手術に立ち会ってくれた外科医で、それが高名な林田健男東大医学部教授であることを初めて知った。

私が、近藤氏から心臓移植についての教示を得たことは幸いだった。それは、氏が心臓移植研究者として日本のみならず世界的に高く評価された外科医であったからだ。

南アフリカのバーナードが心臓移植を実施する以前には、犬使用による長い研究実験の歴史があった。研究は挫折をくり返し遅々として進歩の跡はみられなかったが、ようやく昭和三十年代に入ってからわずかながらもその成果がみられるようになっていた。

やがて昭和三十五年、三十歳代のアメリカの外科医シャムウェイ、ローアの共同研究実験の結果、心臓移植を人体に応用することも可能視される成果が生れた。その二人の外科医は、新たに開発された人工心肺を使用して犬に心臓移植をこころみ、術後二十一日間生存という驚異的な生

存記録を打ちたてたのだ。

しかし、その後アメリカのブルーメンストックによって四十二日間犬を生存させた記録を最後に、それを更新する報告は跡を絶った。

近藤氏は、その心臓移植という分野に深い関心をいだいて昭和三十九年一月に渡米、ただちに研究生活に入った。そして、シャムウェイ、ローアの人工心肺を使用する実験とは異る日本で開発された超低体温法を応用し、仔犬使用による実験をおこなった。その結果、三十七頭のうちの一頭は五十七日間、他の一頭は実に二百十三日間生存という世界最長の記録を生んだのだ。

近藤氏の存在は、一躍世界的なものとなった。その後氏は日本へ帰り研究実験をつづけていたのだが、輝やかしい成果をあげた学者とは思えぬほど謙虚な外科医で、頻繁に訪れる私に理解しやすいように熱心に説明をくり返した。そして、実験動物管理室にも案内して移植手術をおこなった雌犬をみせてくれたりした。

その賢そうな白い犬は、同所移植といって心臓をえぐりとってから再びその胸部におさめる実験的手術をうけた犬で、手術後妊娠し仔を生んだほど元気だった。むろんその手術は同所移植なので、心臓移植の最大の難問である拒絶反応の危険はなくそれだけ成功率もたかいのだ。

私は、小説を書く上で心臓移植手術を実際に自分の眼でみたかった。が、心臓移植は世界で二十数例しかやっていない手術であり、しかも手術室には外部の者が入ることはできず私の希望は

初めから無理であった。ただそれに準ずるものとして犬使用による移植実験を眼にすることは可能であり、私はその旨を近藤氏に申出でた。

近藤氏は、私の希望をいれてアメリカ留学中に犬を使用した移植実験の経過をおさめたフィルムがあるからそれをお見せしようと言ってくれた。私にとって、アメリカ留学中の氏と手術室の内部を知るためにもそのフィルムをぜひ見たいと思った。そして、石原プロの川野氏と連絡をとり、他のフィルムを映写するついでに、近藤氏のフィルムをスクリーンに映してもらうことになったのだ。

試写室のライトが消え、スクリーンに天然色の映像が鮮やかに浮び上った。

マスクで口をおおった近藤氏の姿が映った。氏のまとっている手術着は、白衣ではなく緑青に似た緑色の衣服だった。

奇異に思った私が横に坐った近藤氏にたずねると、氏は世界的な趨勢として緑衣が多く使用されていると告げ、それは手術担当者の眼の疲労をやわらげるためだと称されている、と言った。

スクリーンには、小さな浴槽のような二個の容器の中に、麻酔をかけられているらしい仔犬が一匹ずつ氷塊のまじった水の中に仰向けの姿勢で漬けられている。これが超低体温法か、と私は画面に眼を据えた。犬の肛門にさしこまれた温度計が映った。

「仔犬の体温を摂氏十六度までさげます」

闇の中で、近藤氏の声がした。

移植手術が、はじまった。一匹の犬が氷水の中から出されると、胸部にメスが食いこみ血液が流れ出た。

近藤氏のメスが、助手の外人外科医の協力で目まぐるしく動き、やがて鼓動する心臓が剔出された。そして、それは別の液体にみたされた小さな容器に落された。その仔犬は、完全に生命を断たれたのだ。

「あの容器の中には、摂氏四度のリンゲル液が入っています」

氏の言葉がきこえた。

画面の中の氏が、他の仔犬を氷水の中から手術台に移した。メスが食いこむとまた血液が噴出した。心臓が露出した。氏が助手から渡された鋏状のもので、血管から流れる血液を素早くとめてゆく。

メスの先端が心臓をえぐり出し、やがて胸部は空洞になった。

リンゲル液にひたされていた心臓が、その部分にはめ込まれた。氏のゴム手袋をつけた指先が心臓を手際よく糸で縫いつけてゆくと、助手の手にした鋏が糸を切る。それは慎重におこなわれているのだろうが、私には意外にも無造作な切除であり縫合だと思えた。

心臓が仔犬の胸部に縫いつけられた。氏の指先が心臓を押したり引っぱったりして、縫合が完

全であるか否かをしらべている。
氷水が水槽から排出されて、代りに湯気の湧く温湯がみたされ、その中に移植をうけた仔犬の体が漬けられた。冷くなった仔犬の体温が通常の温度までたかめられてゆくのだ。
「これから心臓をマッサージします」
氏が、言った。
露出した心臓を、ゴム手袋をはめた氏の指が揉みはじめた。心臓は、停止したままである。氏の指は時折り心臓からはなされたが、心臓は動く気配もない。氏が、再びマッサージをはじめた。
そんなことが数回くり返されたのち氏の指がはなされた瞬間、私は思わず眼をみはった。
心臓が、ふるえている。一個の生き物のように不規則な動きで痙攣している。心臓は、死んではいなかった。他の仔犬から剔出されてリンゲル液に漬けられていた心臓は、生きる力を残していたのだ。
氏の指が、またマッサージをはじめ、そしてすぐにはなされた。心臓のふるえはさらに強くなって、瞬間的にはねるように動く。心臓は臓器の中で原始的なものだといわれているが、たしかにその動きを見ていると爬虫類にも似たふてぶてしい強靭さが感じられた。
氏の両掌に、スプーンのようなものが一本ずつにぎられた。それは電極で、心臓に高圧電流を流して刺戟をあたえるのだ。

電極が、心臓を両脇からはさんではなされた。
眼に、熱いものがつき上げてきた。心臓が、健気に思えた。いじらしくもあった。心臓は、リズミカルな動きを開始し、それは今後も長い歳月動きつづけるにちがいないと思われるような力強い動きで律動しはじめたのだ。
生命というものの不可思議さに、私は感動した。停止してしまったものが、再び生命をとりもどしていきいきと動いている。私は、その仔犬に生命が宿ったことを実感として感じとった。
次のシーンでは犬舎が映り、黒い体毛をもつ犬が餌を食べている。
「これが移植をうけた犬です。やはり拒絶反応が起って、術後二週間目に死亡しました」
氏の説明が終ると、スクリーンから画像が消え、室内に電気がともされた。
隅の椅子でフィルムを見ていた川野氏が、
「驚きましたね。動いた時はじーんとしましたよ」
と、言った。
私は、そのフィルムを見たことによって、心臓移植という医学的事実を小説の世界の中に引きずり込むことはできるように思った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.